

2018年度 教育学部点検・評価報告書

「アセスメント・ポリシーに基づいた学習成果の測定及び可視化を推進」

2019. 3. 5

教育学部では今年度、昨年度設定したアセスメント・ポリシーに基づく学習成果の測定に取り組むとともに、学生の学習成果改善を目指して新たに3つの活動に取り組んだ。後者の活動は自己点検・評価というよりはむしろFD活動の文脈に位置づけられるべきものであるが、どちらも学生の学習成果を向上させることを目標とする活動であることに変わりはない。本報告書では、これらについて振り返るとともに、来年度への課題と展望について述べていきたい。

(1) 学部自己点検・評価分科会

委員:鈴木(学部長)、吉田(副学部長)、平井(教育学科主任)、久保田(児童教育学科主任)、坂本、舟生、牛田、高野、鶴田

まもなく取り組みが始まる次期認証評価を視野に入れ、学部の自己点検・評価活動を行った。来年度以降は、分科会がより主体的に自己点検・評価活動を展開することで、PDCAサイクルを着実に回していきたい。

第1回委員会:7月3日(火) 学生参加型の内部質保証について協議した

第2回委員会:10月16日(火) 学習成果の測定及び可視化の進捗について協議した

第3回委員会:1月16日(水) 今年度の総括と来年度へ向けての目標について協議した

(2) 2018年度の教育改善活動

初めにも述べたように、教育学部では今年度、大きく分けて以下の3つの授業改善活動を行った。これらは必ずしも自己点検・評価活動における目標「アセスメント・ポリシーに基づいた学習成果の測定及び可視化」に直接つながるものではないが、どれも学生の学習成果を基礎に置いた活動であるため、簡単に紹介する。

1. AP事業による授業アセスメント

AP事業のプログラムにしたがい、マイルストーン科目、タッチストーン科目を設定して、2018年度春学期の4月と7月に、授業実施前後のアンケート調査を行った。

- ・リフレクションシート
- ・学期終わりのルーブリック
- ・自己成長記録シート

がデータとして回収されているので、今後学習成果について精査して教育改善に結び付けたい。

《アセスメント科目》

1年次(マイルストーン):初年次セミナー(両学科)

2年次(タッチストーン):教育心理学I(教育学科)、学校研究(児童教育学科)

2019年度は3年次(キャップストーン)の「学校カウンセリング」(両学科)を予定している。

AP事業はまもなく終わりを迎えるので、事業終了後を見据え、学部として成果を共有し、教育の改善に努めていきたい。

2. 学生を交えた「科目担当者会議」による学習成果の可視化

FD 計画の一環として、教育学部における授業のありかたについて協議するため、「科目担当者会議」を下記のように開催し、AP 事業推進委員を中心に、学生参加のもと意見交換を行った。これは今年度の目標の 1 つである「学生参加型の内部質保証」を本格的に始める試みでもあった。

・第 1 回会議:7 月 11 日(水)

授業外学習時間の確保を目指す中で、科目数の多い教育学部では、学生が課題の量の多さに疲弊していることが指摘され、今後は課題の量や質などを把握することとなった。各教員の授業設計や課題提出の工夫を共有できたことは今後の自己点検・評価活動につながる。

・第 2 回:10 月 10 日(水)

学生代表 2 名の参加のもと、春学期に行われた専門科目「学校研究」について振り返りを行い、学生からも学習成果を踏まえ、授業内容について感想・意見が率直に述べられた。

なお、学部 FD 活動としては、上記「科目担当者会議」のほか、教員相互の授業見学〔春学期、計 6 回〕、PASS を利用した授業改善活動〔秋学期〕に取り組んだ。

3. 学習成果に基づいてカリキュラムの改善を目指す「教科教育担当者会」の開催

教育学部には小学校の教科に合わせた多くの教職科目があり、個別教科の担当者には学生の全体的な学習成果が見えにくい状況がある。そこで、教科教育全体として、教科横断的に学習目標や成果について話し合い、互いの授業実践を通して情報共有を行うため、新たに「教科教育担当者会」を開催した。

・第 1 回:7 月 31 日(火)

学習指導案の指導や模擬授業の実施方法について意見交換し、多くのアイデアや情報を共有することができた。

・第 2 回:10 月 18 日(木)

教科教育におけるアクティブ・ラーニングの方法について意見交換を行い、より実践的な指導の方法について話し合った。

・第 3 回:12 月 21 日(金)

学習指導案の共通形式について考察するとともに、模擬授業の評価方法について話し合った。また、学生から望む声の大きい「放課後模擬授業クラブ」について取り組むことにした。

・第 4 回:1 月 30 日(木)

「模擬授業クラブ」の実施時期や方法について話し合った。

・第 5 回:3 月 13 日(水)開催予定

教育学部の両学科の授業には、教育学、心理学、教科教育などいくつかのグループがある。今後はこれらのグループごとのまとまりを大切にして、授業内容の体系化や学習成果に基づく授業改善を目指して話し合うことで、学生たちの全体的な学習効果の改善を目指したい。

自己点検・評価活動と上記 FD 活動を組み合わせ、学部全体の教育パフォーマンス向上のサイクルを確立していきたい。

(3) 学習成果の測定と可視化について

ここからは本年のメインテーマである「アセスメント・ポリシーに基づいた学習成果の測定及び可視化」、すなわち学部のアセスメント・ポリシー並びにアセスメント・プランによる学習成果の測定・可視化の状況について述べる。

まず教育学部のアセスメント・ポリシー及びアセスメント・プランについて振り返る。

◎教育学部アセスメント・ポリシー(抜粋)

学習成果の点検に際しては、ディプロマ・ポリシーに謳う4領域の能力・資質の発達・変容をとらえるため、次のような多様な指標・ツールを用い、多面的・複合的に行います。また、点検結果を踏まえ、個々の授業改善にとどまらず、プログラム全体の改善・向上に努め、学部教員間の情報共有・合意形成を進め、改善に向けて真摯に取り組んでいきます。

《アセスメント指標・ツール》

【量的なもの】①GPA、②授業アンケート、③教員免許取得者数、④教員採用試験合格者数、⑤TOEIC等の語学試験、⑥語学基準達成者数、⑦海外留学体験者数、⑧学部実施の学生調査、⑨大学実施の学生生活調査、⑩就業力テスト

【質的なもの】①AP 事業アセスメント科目における振り返り記述、②「学びの集大成」、③学校インターンシップ・教育実習に際しての外部評価、④卒業研究(サンプル調査)

【その他、補足的に適宜活用するもの】

①ジュニアペーパー評価、②海外研修効果測定、③LMS上の学習ポートフォリオ、④大学適応調査(HPI,RCWなど)およびその結果に基づく抽出聞き取り調査、⑤IR室管理の各種データ

これは学生の学習成果のアセスメントのために利用できる、あらゆる可能性が集合体として示されているものであるが、これらの指標やツールをどの時点でどのように用いるかについては示されていない。それを時系列的に展開したものが次のアセスメント・プランである。本報告書では、このアセスメント・プランの進捗状況について述べる。

◎教育学部アセスメント・プラン(概要)

- ・ ステップ 1: 学部 DP に明示された 4 領域にわたる 8 項目の学習成果達成に向けた取組み(授業科目)が、どのように配置・配列されているか、整理してカリキュラムマップとして示す。
- ・ ステップ 2: 科目の配置・配列の妥当性を学部として確認し、各科目担当者は当該科目を通じて育成・達成が期待される学習成果に配慮したシラバスを作成する。
- ・ ステップ 3: 当該科目で好成績を上げるということは、DP の当該学習成果も認められるということになる。専門科目の GPA が高い学生は、学部の DP 要件を満たしている可能性が高いと推定される。
- ・ ステップ 4: 授業アンケート及び学生調査を活用した定期モニタリングを行う。
- ・ ステップ 5: 初年次教育、教職課程、書く力の育成等、各種プログラムに応じたアセスメントを行う。
- ・ ステップ 6: 総括的に 4 年間の学習成果をアセスメントするために、卒業研究、学びの集大成、GPA や大学適応調査を基に抽出したサンプルからの聞き取り調査を活用する。特に卒業研究においては、DP の 8 項目に関する評価ルーブリックを作成し、それに基づく達成度を検討する。

上記各ステップについて、今年度の状況を示す。

《実施状況》

- ステップ1:教育学科、児童教育学科それぞれの専門科目に対するカリキュラムマップを作成し、教育課程の体系性が可視化できるようにした。作成したカリキュラムマップは、2019年度入学生から履修要綱に明示されるようになり、各学生の履修の参考にできるようになる。〔根拠資料:両学科のカリキュラムマップ及び2019年度入学生用履修要項〕【進捗度:A】
- ステップ2:科目の配置・配列の妥当性については、「科目担当者会」、「教科教育担当者会」において、学生の声も取り入れた形で検討が進められている。教科群としての目標や成果、個々の授業の効果等について議論が進められていることは大きな前進である。しかしながら、今のところ現状認識を深め、改善方法を議論している段階で、科目の配置・配列の妥当性について客観的に評価するレベルにはまだ達していない。
 今後は履修要綱にカリキュラムマップが明示されたことにより、授業科目の系統性がより一層明確になり、検討が進めやすくなるものと考えられる。これに学生の授業評価を加えれば、DPの各項目と授業の配置、そして学生の学習成果について、数値に基づく判断が可能となり、妥当性の検討がさらに進むものと思われる。〔根拠資料:科目担当者会議事録、教科教育担当者会議事録、授業評価アンケート結果〕【進捗度:B】
- ステップ3:言うまでもなく、学生個人の指標としてのGPAは多方面において活用されている。GPAの高い学生はDPの達成度も高いと判断することには妥当性があり、そうした判断のもと、教職課程には「GPA3.0以上」という関門が設けられている。
 しかしながら、学部や学科全体として、たとえばGPAの分布を統計的に処理して教育課程全体を見直すといった作業は行われていない。アセスメント・ポリシーにあるように、GPAデータを活用してプログラム全体の改善・向上に努めることが課題である。〔根拠資料:学生のGPA分布・推移〕【進捗度:B】
- ステップ4:ステップ2でも述べたように、授業アンケートの結果を活用してカリキュラム全体の分析・改善につなげるといった活動はまだ行われておらず、今後委ねられている。
 一方、学部学生調査の分析は着実に進行しており、量的・質的分析がすでに6年にわたって蓄積されてきている。調査結果に基づく学生指導のあり方については教授会にて報告・検討が行われている。しかしながら、現在のところ学生の意識を知り、学生指導に役立てるという方向が主であり、教育課程改善のためのモニタリングとするにはまだ検討が必要である。〔根拠資料:学生調査項目および分析結果〕【進捗度:B】
- ステップ5:初年次教育についてはAP事業のマイルストーン調査を行った。来年度にはキャップストーン調査が行われ、AP事業への取り組みが完結するとともに、そこでの知見を活かした学部全体の授業改善への取り組みを始める予定である。
 教職課程については、教員養成評価機構による「教員養成教育認定評価基準」及び「自己分析書作成の手引き」を活用した自己点検・評価に参加することが決定しており、早くも来年度には認定評価を受けるための文書作成に取り掛かることになる。これは全国の教員養成大学・学部が参加する大掛かりな認証評価になる予定であり、本学教職課程もこれまでの実績に基づき、さらなる改善のための機会としたい。
 書き力については、2020年度以降新カリで実施されるジュニア・ペーパー評価に基づいて行う予定である。〔根拠資料:AP事業資料〕【進捗度:C】
- ステップ6:卒業研究においてDP項目に基づくルーブリック評価を作成・活用することになっており、一部のゼミでは実施しているが、学部全体での共有・活用はまだこれからである。
 学びの集大成や学習成果のアセスメントのための聞き取り調査などは未実施であるが、卒業生に対する学生調査は実施しており、今後分析を行う予定である。〔根拠資料:卒業研究ルーブリック〕【進捗度:C】

これらの実施状況を、アセスメント項目に対応させて表によって示す。

アセスメント項目	アセスメント指標(実施時期)	アセスメント実施状況
【知識・理解】 教育学と心理学に関する基本的な知識を修得し、研究方法を理解する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 対応する授業の成績による GPA の推移(各セメスター) ・ 卒業研究 I (ジュニア・ペーパー)の評定(第 6 セメスター) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ GPA の推移は追っているが、分布の分析など学部全体での活用は不十分。 ・ 2020 年度からジュニア・ペーパーを活用予定。
【考える力】 諸問題を教育的・心理学的な観点から思考し、解決方法を考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 対応する授業の成績による GPA の推移(各セメスター) ・ 授業アンケートの結果(毎セメスター) ・ キャップストーン科目(指定科目の開講セメスター) ・ 卒業研究 I (ジュニア・ペーパー)の評定(第 6 セメスター) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ GPA の推移は追っているが、分布の分析など学部全体での活用は不十分。 ・ 教育課程改善を目的とした組織的利用は不十分。 ・ キャップストーン科目は 2019 年度実施。 ・ 2019 年度からジュニア・ペーパーを活用。
【行為する力】 教育学と心理学の研究方法を適切に利用し、諸問題解決に取り組む。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 対応する授業の成績による GPA の推移(各セメスター) ・ ・ キャップストーン科目(指定科目の開講セメスター) ・ 卒業研究 II (卒業論文、学びの集大成)の評定(第 8 セメスター) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ GPA の推移は追っているが、分布の分析など学部全体での活用は不十分。 ・ キャップストーン科目は 2019 年度実施。 ・ 卒業論文のルーブリックを作成したが、共有・活用はこれから。学びの集大成は未実施。
【態度】 自己成長を追求し、価値に対する倫理性と他者の成長への責任感を持つ。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生調査の結果の推移(毎年 4 月・9 月) ・ ・ 卒業直前の学生へのアンケート(第 8 セメスター) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生調査は毎学期実施・分析しているが、教育課程の見直しにはつなげていない。 ・ 卒業時学生調査実施しており、今後分析を進める予定。

(4) 今後の方針

教育学部では検証可能なアセスメント・プランを策定して実施しつつあり、学習成果の可視化への準備は整っているが、数値的分析を本格的に行う段階にはまだまだ至っておらず、今後学部自己点検・評価分科会で積極的な評価活動を展開する必要がある。

2019 年度はまず GPA 分布の分析、授業アンケート結果とカリキュラムマップの紐づけから始め、数量的情報をもとにカリキュラム改善の検討を進めていきたい。